

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」(平成29年度第1回研究会)

日時:平成29年7月23日(日曜日)午後1時30分より午後5時30分

場所:AA 研302号室

出席:梶、角谷、高村、塩田、若狭、牧野、阿部、古本、米田、品川

報告タイトルと報告者氏名・所属

牧野友香(AA研共同研究員, 大阪大学大学院生)

「ランバ語の名詞と動詞に見られる声調パターン」

品川大輔(AA研所員)

「ロンボ語(Bantu E623)の声調パターン試論」

#### 1. 牧野友香「ランバ語の名詞と動詞に見られる声調パターン」

ランバ語では名詞と動詞ともに高声調が現れるかどうかは、語幹あるいは語根によって決定される。名詞では、まず接頭辞に高声調が現れるもの(1)とそうでないもの(2)に二分される。

(1)	umúchila	imíchila	(2)	umulopa	imilopa
	u-mu-chila	i-mi-chila		u-mu-lopa	i-mi-lopa
	AV-3NP-tail	AV-4NP-tail		AV-3NP-blood	AV-4NP-blood
	「尻尾SG、PL」			「血SG、PL」	

ただし以下のように、語幹頭の音節のピッチが上がるもの(3)、次末音節のピッチが上がるもの(4)、(5)、語末の音節のピッチが上がるもの(6)が見受けられた。

(3)	inkúlimba	inkúlimba			
	i-n-kulimba	i-n-kulimba			
	AV-9NP-pigeon	AV-10NP-pigeon			
	「鳩SG、PL」				
(4)	akápokóso	utúpokóso	(5)	ichinsokéla	ifinsokéla
	a-ka-pokoso	u-tu-pokoso		i-chi-nsokela	i-fi-nsokela
	AV-12NP-ankle	AV-13NP-ankle		AV-7NP-branch	AV-8NP-branch

「くるぶしSG、PL」

「枝SG、PL」

- (6) ichilolá ifilolá  
i-chi-lola i-fi-lola  
AV-7NP-mirror AV-8NP-mirror  
「鏡SG、PL」

(2) の平板の例と、(4) ~ (6) の次末音節や語末の音節のピッチが上がる例については、以下の (7)、(8) のように同じ語幹を取っているにもかかわらずピッチの上がり方が異なる例が見られたため、音韻フレーズの取り方によって現れるものである可能性が高い。今後さらなる調査が必要である。

- (7) ulubafú imbafu 「肋骨」  
u-lu-bafu i-n-bafu  
AV-11NP-rib AV-10NP-rib  
(8) ímbeleele ímbeléele 「ヤギSG、PL」  
i-n-beleele i-n-beleele  
AV-9NP-goat AV-10NP-goat

動詞においても、語根によって高声調が現れるかどうかが決まる。高声調が現れる位置は、どのテンス・アスペクト形式を用いるかによって異なる。肯定形では、時制接辞に高声調が現れる形式は、以下の (9)、(10) の現在習慣形のほかに、たった今の過去形、過去形、完了形、今日の未来形、未来形がある (呼び方はすべて湯川 (1995) に準じており、例もすべて湯川 (1995) のもの)。語根によって高声調が現れる場合と (9)、そうでない場合があり (10)、語根の性質による対立が保たれている。

- (9) alábona (10) alashita  
a-la-bon-a a-la-shit-a  
3sgSM-HAB-see-BF 3sgSM-HAB-buy-BF  
「彼は見る」 「彼は買う」

今日の過去形では、以下のように時制接辞の直後の音節に高声調が現れ、ここでも語根の性質による対立が保たれる。

- (11) naachibóna (12) aachishita  
n-aachi-bon-a a-aachi-shit-a  
1sgSM-HOD-see-BF 3sgSM-HOD-buy-BF

「私は見た」

「彼は買った」(湯川 1995:14)

肯定形では語根の選択によって高声調が現れるものとそうでないものとの対立が保たれている一方で、否定形では語根の性質による対立が中和される傾向にある。高声調が出てこないもの (13)、(14)、時制接辞の直後の音節に高声調が現れるもの (15)、(16)、常に時制接辞に高声調が現れるもの (17)、(18) がある。

- (13)    **tatwaabweenepo**                    「私たちは見なかった」  
          **ta-tu-aa-bon-ile-po**  
          NEG-1plSM-PAST-see-ANTF-16
- (14)    **tatwaashitilepo**                    「私たちは買わなかった」  
          **ta-tu-aa-shit-ile-po**  
          NEG-1plSM-PAST-buy-ANTF-16
- (15)    **tatwaachibónapo**                    「私は(今日)見なかった」  
          **ta-tu-aachi-bon-a-po**  
          NEG-1plSM-HOD-see-F-16
- (16)    **tatwaachishítapo**                    「私は(今日)買わなかった」  
          **ta-tu-aachi-shit-a-po**  
          NEG-1plSM-HOD-buy-F-16
- (17)    **tatukábonapo**                        「私たちは見ないだろう」  
          **ta-tu-ka-bon-a-po**  
          NEG-1plSM-FUT-see-BF-16
- (18)    **tatukáshitapo**                        「私たちは買わないだろう」  
          **ta-tu-ka-shit-a-po**  
          NEG-1plSM-FUT-buy-BF-16

また、以下の形式では目的語接辞の有無が高声調の分布に影響を及ぼす。現在の否定形では原則高声調は出てこないが、目的語接辞がある場合のみ目的語接辞が高声調になる (19)、(20)。また、今日の未来の否定形式のうちの一つには、基本的に次末音節のピッチが高くなるが、目的語接辞がある場合のみ目的語接辞が高声調になるものがある (後接語の-poはカウントしない)、(21)、(22)。

- (19)    **tatumúbonapo**                        「私たちは彼を見ない」  
          **ta-tu-∅-mu-bon-a-po**  
          NEG-1plSM-null-3sgOM-see-BF-16

- cf.    tatubonapo                   「私たちは見ない」  
       ta-tu-∅-bon-a-po  
       NEG-1plSM-null-see-BF-16
- (20)   tatuchíshitapo               「私たちはそれを買わない」  
       ta-tu-∅-chi-shit-a-po  
       NEG-1plSM-null-7OM-buy-BF-16
- cf.    tatushitatpo                 「私たちは買わない」  
       ta-tu-∅-shit-a-po  
       NEG-1plSM-null-buy-BF-16
- (21)   teeshi    tumúbonepo           「私たちは彼を見ない」  
       teesi    tu-∅-mu-bon-e-po  
       NEG    1plSM-null-3sgOM-see-SF-16
- cf.    teeshi    tubónepo           「私たちは見ない」  
       teesi    tu-∅-bon-e-po  
       NEG    1plSM-null-see-SF-16
- (22)   teeshi    tuchíshitepo       「私たちはそれを買わない」  
       teesi    tu-∅-chi-sit-e-po  
       NEG    1plSM-null-7OM-buy-SF-16LOC
- cf.    teeshi    tushítepo           「私たちは買わない」  
       teesi    tu-∅-sit-e-po  
       NEG    1plSM-null-buy-SF-16

引用文献

湯川恭敏 (1995) 「ランバ語」 『バントゥ諸語の動詞アクセントの研究』 pp.140-157、ひつじ書房.

## 2. 品川大輔「ロンボ語 (Bantu E623) の声調パターン試論」<sup>1</sup>

本発表では、i) ロンボ語<sup>2</sup>の名詞の声調パターン、ii) ロンボ語の動詞の声調実現メカニズム、iii) チャガ系言語（とくに中央キリマンジャロとロンボ）に共通してみられる声調現象について議論を行った。

### 1. 名詞

名詞の声調は、統語環境を変えることによってさまざまな実現形が観察される。本発表では、次の4つの環境について、主に3音節名詞を例にとって論じた。

[a] 単独発話形（単独形、#\_#）

[b] コピュラ *ni* に後続する形（述語名詞形、*ni* \_#）

[b-N] コピュラ *ni* に後続し、かつ否定詞に先行する形（述語名詞否定形、*ni* \_ *ku*）

[c] 属詞が後続して「～の（名詞）」の意を表わす形（属詞後続形、\_ *-a* ~）

各環境における名詞の声調実現を音節数ごとにまとめれば次のようなりストが得られる。

	AA#	[a]	[b]	[b-N]	[c]	gloss(+PB)
<b>1音節</b>						
L	0007	<i>kdu</i> L	<i>kdu</i> L	<i>kdú</i> H	<i>kd'ú'</i> L~H	「耳」 * <i>kútu</i> (G)
H	0034	<i>ndí</i> H	<i>ndí</i> H	<i>ndí</i> H	<i>ndi</i> L	「ひじ」 * <i>dúú</i>
<b>2音節</b>						
LL	N.A.	-	-	-	-	
LH	0026	<i>ndeú</i> LH	<i>ndeú</i> LH	<i>ndeú</i> LH	<i>ndeú</i> LL	「腹」
	0032	<i>shaá</i> LH	<i>shaá</i> LH	<i>shaá</i> LH	<i>shaá</i> LH	「爪」 * <i>jádà</i>
	cf.	<i>úshaá</i> HLH	<i>úshaá</i> HLH	<i>úshaá</i> HLH	<i>ushaá</i> LLH	
HL	0004	<i>nyúsi</i> HL	<i>nyúsi</i> HL	<i>nyusi</i> LH	<i>nyusi</i> LH	「眉毛」
	0005	<i>ríso</i> HL	<i>ríso</i> HL	<i>risó</i> LH	<i>ris'ó'</i> LH~LL	「目」 * <i>jícò</i>

<sup>1</sup> 本発表は、品川・アポリナリ（2016）『チャガ＝ロンボ語 (Bantu E623) 基礎語彙集』の導入部に示した音調パターンに関するスケッチを基にしている。ただし、現在までに収集しているデータが網羅性を欠いていること（とくに声調実現上もっとも環境からの干渉を受けづらいつと考えられる動詞 (FV=*-a*, 肯定形) 直後位置のデータが断片的にしか収集できていない）、またコンサルタント (M.A.さん, 30代女性) の発音自体にかなり不安定さが認められる点から、データとして不十分な点が多々あることを明示しておく。本発表にかかる調査・分析は、2014年度「言語研修実施のための研究者派遣事業」(AA研)、および科研費25770149、16K02630（ともに代表者は発表者）による援助によって可能になった。

<sup>2</sup> ロンボ語の音素目録は次のとおり：子音 /p, t, k; b, d, j [j], g; m, n, ny [ɲ], ng' [ŋ]; f, s, sh [ç], h; v; t' [tç~ts~tʰ~tʰ]; r, ɾ [r], l [l~l̥]; y [j], w/ (mとɲに成節性の対立有り。成節鼻音はm'のように示す)、母音 /i, e, a, o, u/. 声調素としては、明らかにそれと認められるものは/H/のみで、有標の/L/を認めるかについてはより詳細な分析が必要。音声実現形としては(少なくとも)、アップステップ高 [ʰH/ʰV], 高 [H/ʰ], ダウンステップ高 [ʰH/ʰV] (ないし中 [M/ṽ]) を認める。

	cf.	<i>íriso</i> HLL	<i>íriso</i> HLL	<i>íriso</i> HLH	<i>iris(ó)</i> LLH~LLL	
HH	0036	<i>ngóó</i> HH	<i>ngóó</i> HL	<i>ngoó</i> LH	<i>ngoo</i> LL	「心臓」 (cf. *kódo)
H <sup>+</sup> H	0052	<i>m'sw<sup>+</sup>á</i> H <sup>+</sup> H	<i>m'sw<sup>+</sup>á</i> H <sup>+</sup> H	<i>m'suá</i> HLH	<i>m'sua</i> LLL	「粉」
3音節						
LLL	N.A.	-	-	-	-	
([LLH~]) HL <sup>+</sup> H	0205	<i>(m')shek<sup>+</sup>ú</i> LLH~HL <sup>+</sup> H	<i>m'shek<sup>+</sup>ú</i> HL <sup>+</sup> H	<i>m'shekú</i> LLH	<i>m'sheku</i> LLL	「祖母」
	cf.	<i>váshek<sup>+</sup>ú</i> HL <sup>+</sup> H	<i>váshek<sup>+</sup>ú</i> HL <sup>+</sup> H	<i>vashekú</i> LLH	<i>vasheku</i> LLL	
LHL	0006	<i>isóru</i> LHL	<i>isóru</i> LHL	<i>isorú</i> LLH	<i>isoru</i> LLL	「涙」 *códi (Guthrie)
LH <sup>+</sup> H-1	0051	<i>m'shél<sup>+</sup>é</i> LH <sup>+</sup> H	<i>m'shel<sup>+</sup>é</i> HL <sup>+</sup> H	<i>m'shel<sup>+</sup>é</i> HL <sup>+</sup> H	<i>m'shele</i> LLL	「米」
LH <sup>+</sup> H-2	0074	<i>mwalír<sup>+</sup>é</i> LH <sup>+</sup> H	<i>mwalír<sup>+</sup>é</i> LH <sup>+</sup> H	<i>mwalíré</i> LHH	<i>mwalire</i> LLL	「弓」
HLL	0017	<i>kíam(ú)</i> HLL~HL <sup>+</sup> H	<i>kíam(ú)</i> HLL~HL <sup>+</sup> H	<i>kiamú</i> LLH	<i>kiamu</i> LLL	「顔」
HL <sup>+</sup> H	0243	<i>mánen<sup>+</sup>ó</i> HL <sup>+</sup> H	<i>mánen<sup>+</sup>ó</i> HL <sup>+</sup> H	<i>m(á)nen<sup>+</sup>ó</i> HL <sup>+</sup> H~LLH	<i>maneno</i> LLL	「ことば」
	cf.	<i>néno</i> HL	<i>néno</i> HL	<i>n(é)nó</i> HH~LH	<i>nenó</i> LL	
HHL	0011	<i>úlúmi</i> HHL	<i>úlumi</i> HLL	<i>ulumí</i> LLH	<i>ulumi</i> LLL	「舌」 *dími
HH <sup>+</sup> H	0025	<i>ívél<sup>+</sup>é</i> HH <sup>+</sup> H	<i>ívele</i> HLL	<i>(í)vel<sup>+</sup>é</i> HL <sup>+</sup> H~LLH	<i>ivele</i> LLL	「乳房」 *béèdè
4音節						
LLHL	0544	<i>ikafára</i> LLHL	<i>ikafára</i> LLHL	<i>ikafár<sup>+</sup>á</i> LLH <sup>+</sup> H	<i>ikafara</i> LLLL	「生贄」
LHLH	0049	<i>m'ájérahá</i> LHLH~HHLH	<i>májeráha~majeráhá</i> HLHL~LLHH	<i>máj'érá'há</i> HLLH~HHHH	<i>majeraha</i> LLLL	「傷」
LHLL	0132	<i>barábara</i> LHLL	<i>barábara</i> LHLL	<i>barábárá</i> LHHH	<i>barabara</i> LLLL	「道路」
HLHL	0080	<i>íkartási</i> HLHL	<i>íkartási</i> HLHL	<i>ikartási</i> LLHH	<i>ikartasi</i> LLLL	「紙」

1.1 最も多くのパターンが生じる単独形においては、(実現声調をHとLの2つと仮定すれば) 論理的に可能な8パターンのうち6パターン、すなわち、1) LHL, 2) LHH [LH<sup>+</sup>H], 3) HLL, 4) HHL, 5) HLH [HL<sup>+</sup>H], 6) HHH [HH<sup>+</sup>H]が確認される。これらには、次のような実現特徴が認められる。

[1] #HHを除いて、2番目に現れるHは、先行のそれよりやや低く(つまり[<sup>+</sup>H]として)実現する。

[2] 単独の環境で#LLという実現形は一般に認められず、#LHないし#HLという形で実現する。

→初頭音節(形態論的にはcl.5の一部とcl.9/10を除いてクラス接頭辞に相当)と次頭音節(同様に語幹初頭音節に相当)の間には、音調上のpolarityを認めることができる。つまり、単独形では語幹初頭にHをもたない場合、語幹のプロパティーではないHが構造的に付与されていることが推定される。

[3] #HLL#は、#LHL#の間でユレが生じるケースもある(cf. 0072)。

[4] #HLと#HHの間でユレを見せるケースがしばしば確認される。

→これが仮に自由変異化すれば、#HLL#と#HHL#、#HL'H#と#HH'H#の間のパターン上の対立は存在しないことになる。

⇒以上の観察に基づけば、各パターンの基底レベルの語幹の声調指定を、それぞれ、1) HL, 2) HH, 3) LL, 4) LL, 5) LH, 6) LHと解釈することが可能である。パターン1)および2)はH始まり語幹 (H-series), 残りはL始まり語幹 (L-series) であり、後者の場合は、polarityによってクラス接頭辞にHが付与されると解釈する。そして、4)および6)のパターンにおいては、そのHが右方に拡張して実現すると捉えることができる (つまり、3) vs. 4), 5) vs. 6)のパターン対立は、初頭Hに関する [-spread] vs. [+spread] という形で一般化できる)。

1.2 述語名詞形においては次のような実現特徴が認められる。

[5] この構造での音調実現形は概ね単独形と変わらないが、#LH'H-1#はHL'Hの形で、#HHのパターンは#HLで実現する。

→前者に関しては、COP *ni* が基底的に有するHがL音節と結合して実現している (H音節の前では消去される。cf. Anti-Meeussen's Rule) と見られる。後者に関しては、#HH'H# (0025) がHLLの形で実現しており、語末音調も変わっている点で不規則であるが、実際このパターンの別の例ではHL'Hで実現するものも確認されている；#*másiw'á*# → *yá ni másiw'á* (0120「池, 湖」)。

1.3 述語名詞否定形については、次のような実現特徴が認められる。

[6] この構造では、否定詞 *ku* の有するHの左方音節での (予期的) 実現によって、すべての例で語末音節にHが実現している (このHは、少なくとも聴覚印象上は先行のHと同等の高さで実現する)。このとき、#HLL#および#HLH#型で、頻繁にHLH~LLHのユレ (ないし不安定な実現) が観察される (さらにHLHが許容されればHHHも許容される場合が多い)。

→動詞構造における否定詞によるspread (2.3) と並行的に捉えたとしたら、名詞語幹末のHはこの構造においては脱落したうえでspreadが生じていると見られるか。

1.4 属詞後続形については、次のような実現特徴が認められる。

[7] この構造では、すべての例でLLLに中和される。興味深い点は4音節以上の名詞の場合で、*taréto*「タレト (人名)」のHが左方に移動し、*táreto* として実現する例が比較的安定的に観察されることである；e.g. *ijeraha la táreto*, cf. *jeraha la taréto* (ともに「タレトの傷」)。つまり、(属辞と合わせて) 6音節以上のL連続を回避する何らかの制約の存在が推定される。

## 2. 動詞

動詞に関しては、ロンボ語 (および中央キリマンジャロ諸語) において一般的な、以下の現象について論じた。

2.1 主節動詞の肯定形においては、初頭音節か次頭音節のいずれかで高音調が実現する（これを仮に initial H (IH)と呼ぶ）。また否定形においては、原則としてこのIHが実現しない（「否定の音調パターン (NTP) 」）。

- (1) a. *ngí-le-m' ≠ loli-a /ngílem'lolya/* vs. *ngi-le-m' ≠ lólí-á* *ku*  
 SM.1sg-PST1-OM3sg ≠ 'see'-F SM.1sg-PST1-OM3sg ≠ 'see'-F NEG  
 「私は彼（女）を見た」 「私は彼（女）を見なかった」  
 b. *dú ≠ end-(é)* vs. *du-tá ≠ end-(é)*  
 SM.1pl ≠ 'go'-SUBJ SM.1pl-NEG.SUBJ ≠ 'go'-SUBJ  
 「行きましょう」 「行かないでおきましょう」

2.2 主節動詞に他の品詞が先行する場合、先行語の語末がHでありかつ動詞の初頭音節もHであるときは、（完了形を典型的な例外として）原則として後者のHがより高く実現する。

- (2) a. *m'dí shú 'úúwa*  
 m'-dí shu u-i- ≠ u-a  
 NPx3-tree DEM.N.3 SM3-CONT ≠ fall-F  
 “This tree is falling down.”  
 b. *nguo safó sáumá*  
 N-guo si-afo si-a ≠ um-a  
 NPx10-cloth PPx10-POSS.2.sg SM10-ANT ≠ get dried-F  
 “Your clothes have been dried.”

2.3 否定詞 *ku*に先行する音節（動詞に後節する場合は動詞語末）は、Hで実現する。このHは、先行音節のみを高くすることもあれば、先行語全体を高くすることもある（高音調拡張 *tone spreading*）。

- (3) a. *du-í ≠ som-a* *ki-tábu*  
 SM.1pl-PROGR ≠ 'read'-F CPx.7-'book'  
 「私たちは本を読んでいる」  
 b. *du-í ≠ som-a* *ki-t(á)bú* *ku*  
 SM.1pl-PROGR ≠ 'read'-F CPx.7-'book' NEG  
 「私たちは本を読んでいない」

表1：≠ *loli* 「見る」の一般現在形

SM.1sg:	<i>ngí ≠ loli-a /ngílolya/</i>	SM.1pl:	<i>dú ≠ loli-a /dúlolya/</i>
SM.2sg:	<i>ú ≠ loli-a /úlolya/</i>	SM.2pl:	<i>mú ≠ loli-a /múlolya/</i>
SM.3sg:	<i>n-é ≠ loli-a /nélolya/</i>	SM.3pl:	<i>vé ≠ loli-a /vélolya/</i>

表2：≠ *loli* 「見る」の一般現在否定形

SM.1sg:	<i>ngi ≠ lólí-á ku</i>	SM.1pl:	<i>du ≠ lólí-á ku</i>
SM.2sg:	<i>u ≠ lólí-á ku</i>	SM.2pl:	<i>mu ≠ lólí-á ku</i>
SM.3sg:	<i>e ≠ lólí-á ku</i>	SM.3pl:	<i>ve ≠ lólí-á ku</i>

→表1と表2を比べると、ちょうど肯定形の音調パターンがひっくり返った形になる。すなわち、i) 肯定形のIHは消去され (NTP) , ii) それ以外の構造全体がHで実現する。このHは、否定詞 *ku* に起因するHが語幹初頭まで拡張したと解釈される。このとき、H動詞の場合、語幹初頭音節には拡張しない（≠ *káb-is* の *-is* は使役接尾辞であるが、語彙的なHは有さない）。

2.4 OMは人称単数でL, 複数および一般クラスでHを有するが (cf. PB), そのHは右方に1音節分移動して実現する (以下の例におけるSM *n-e-* は3人称単数) .

表3: L動詞 ≠ *loli*におけるOMの実現 (一般現在形)

OM.1sg: <i>n-é-ng' ≠ loli-a /néng'lolya/</i>	OM.1pl: <i>n-é-du ≠ lóli-a /nédulólya/</i>
OM.2sg: <i>n-é-k ≠ loli-a /néklolya/</i>	OM.2pl: <i>n-é-mu ≠ lóli-a /némulólya/</i>
OM.3sg: <i>n-é-m' ≠ loli-a /ném'lolya/</i>	OM.3pl: <i>n-é-va ≠ lóli-a /névelólya/</i>

OMが複数のときのみ, 語幹頭音節でHが実現していることが確認される (単数形でOM上に実現しているHはIHが拡張したものと見られる). ただしこのOMのHは, H動詞を語幹に取る場合は実現しない. また, OMが複数のケースでは, OMのHと動詞語幹のHが基底段階で並置され, そのH連続を回避する, いわゆるメーウセンの逆規則 (anti-Meeussen's Rule, HH → ØH) によって, OMのHが消去される.

表4: H動詞 ≠ *káb*におけるOMの実現 (一般現在形)

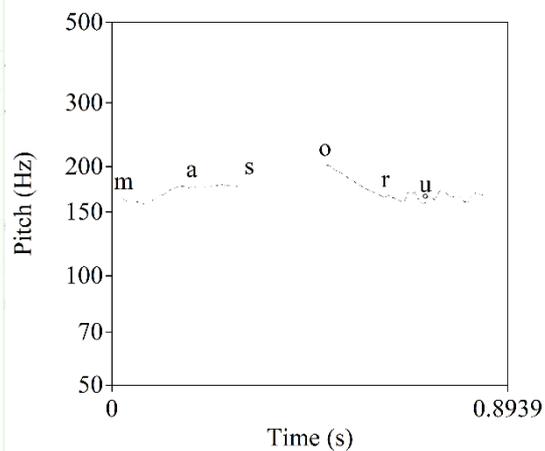
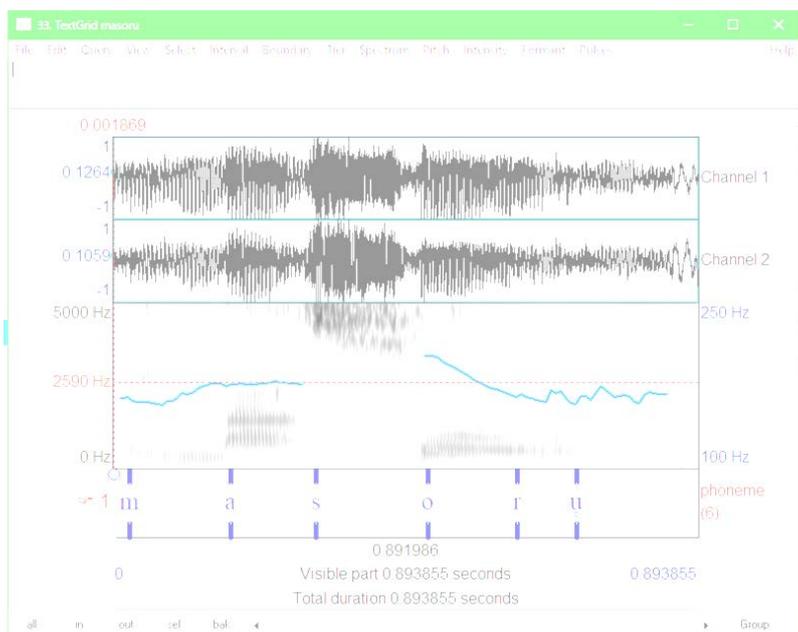
OM.1sg: <i>n-é-ng' ≠ kab-<sup>1</sup>á</i>	OM.1pl: <i>n-é-du ≠ kab-<sup>1</sup>á</i>
OM.2sg: <i>n-é-k ≠ kab-<sup>1</sup>á</i>	OM.2pl: <i>n-é-mu ≠ kab-<sup>1</sup>á</i>
OM.3sg: <i>n-é-m' ≠ kab-<sup>1</sup>á</i>	OM.3pl: <i>n-é-va ≠ kab-<sup>1</sup>á</i>

2.5 以上の一般特徴を用いることで, 動詞の音調タイプ (つまりH動詞かL動詞か) を確定できるはずであるが, 常に明瞭な形で実現するわけではない. 例えば (4) では, 否定形において *ku* に起因するHが語幹頭音節まで拡張する点においてはL動詞のふるまいを見せるのに対し, OMのHが語幹頭で実現せず語幹次頭で実現する点は, H動詞の特徴を見せている. このようなトーンのユレについては, さらなる調査・分析が必要である.

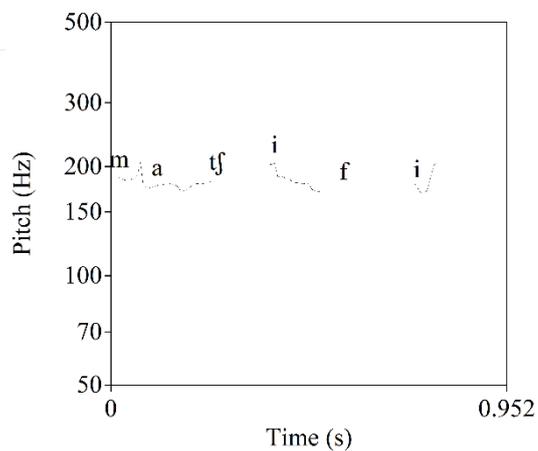
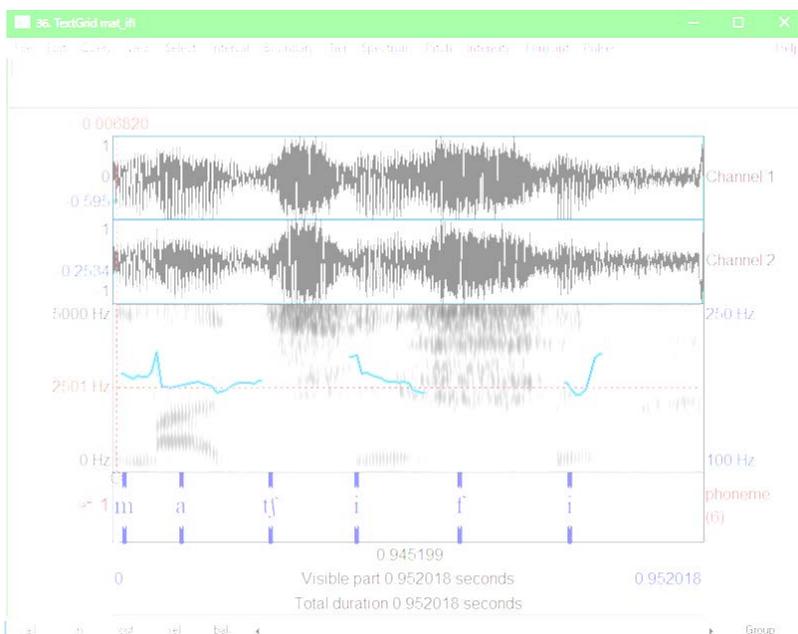
- (4) (0781 ≠ *ig-a* 「真似る」 > ≠ *ig-is-a* 「～に真似させる (使役形)」)
- a. *ng<sup>1</sup>-va ≠ ig-ís-á ku* 「私は彼らに真似させない」  
SM.1sg-OM.3pl ≠ 'send'-APPL-F NEG
- b. *i-va ≠ ig-ís-a* 「彼らに真似させること」  
INF-OM.3pl ≠ 'immitate'-F

付図：パターン別名詞単独形ピッチ曲線例

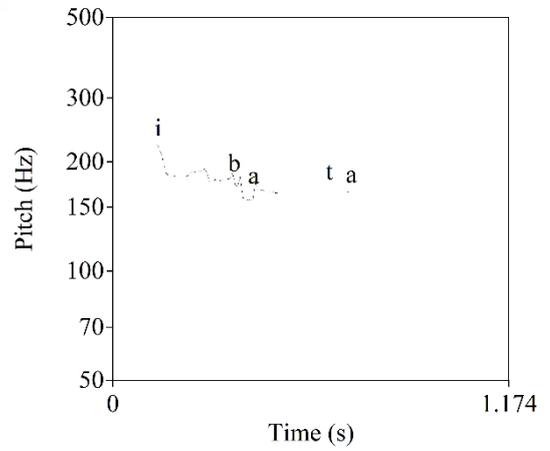
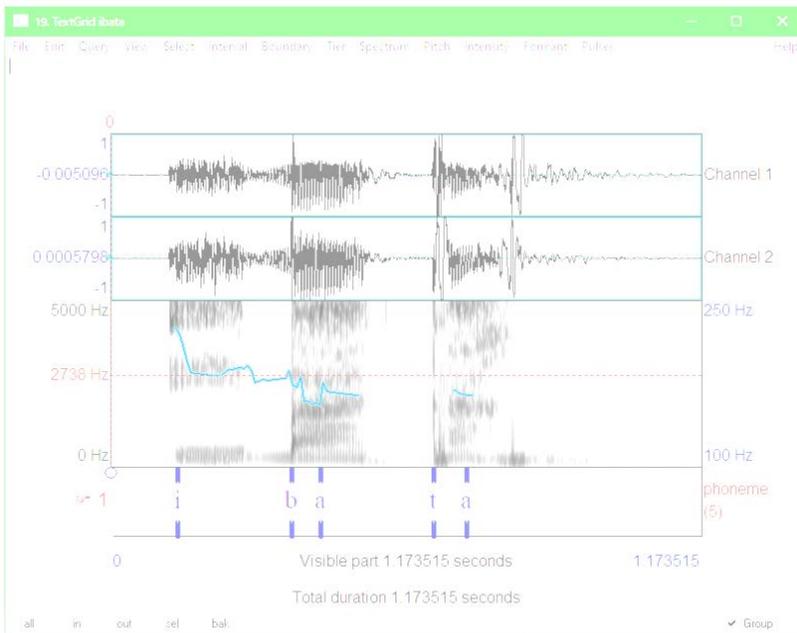
LHL: #masoru# 「涙」



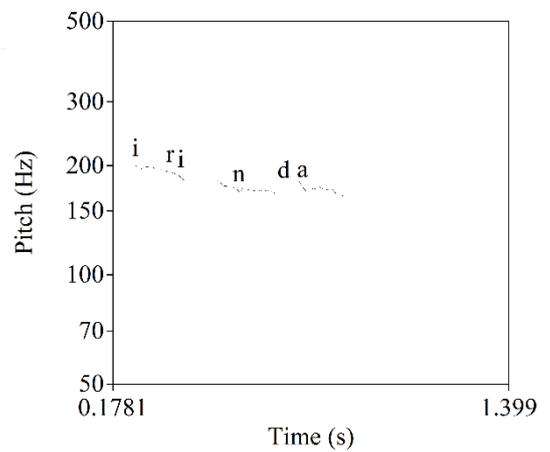
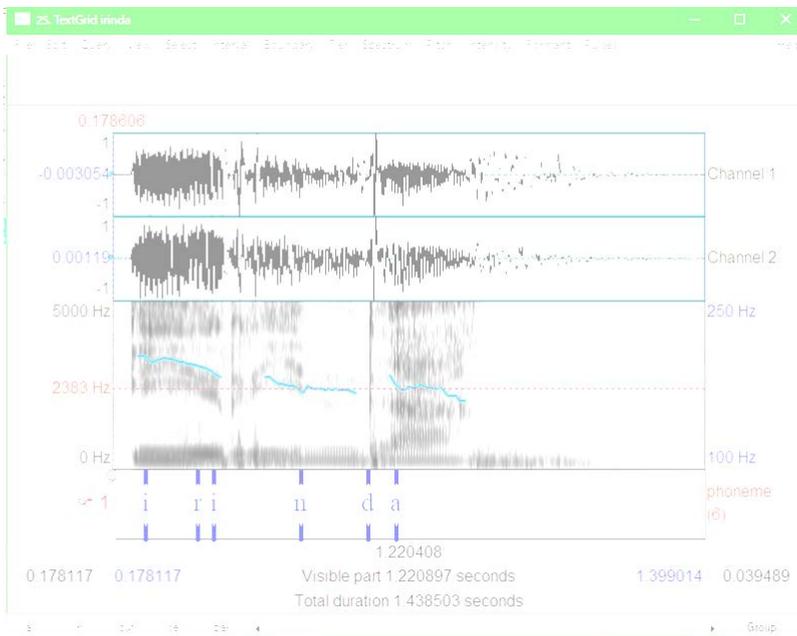
LH'H: #mat'ifi# 「糞」



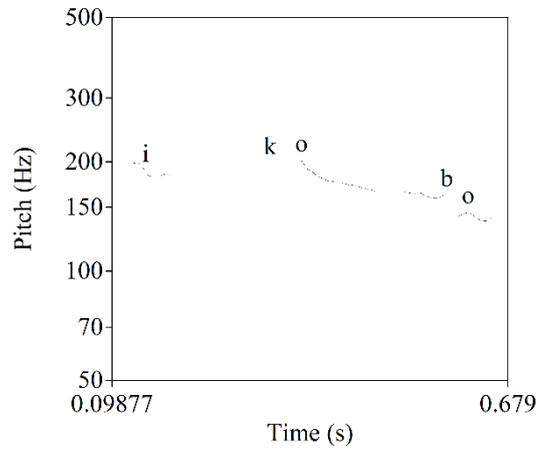
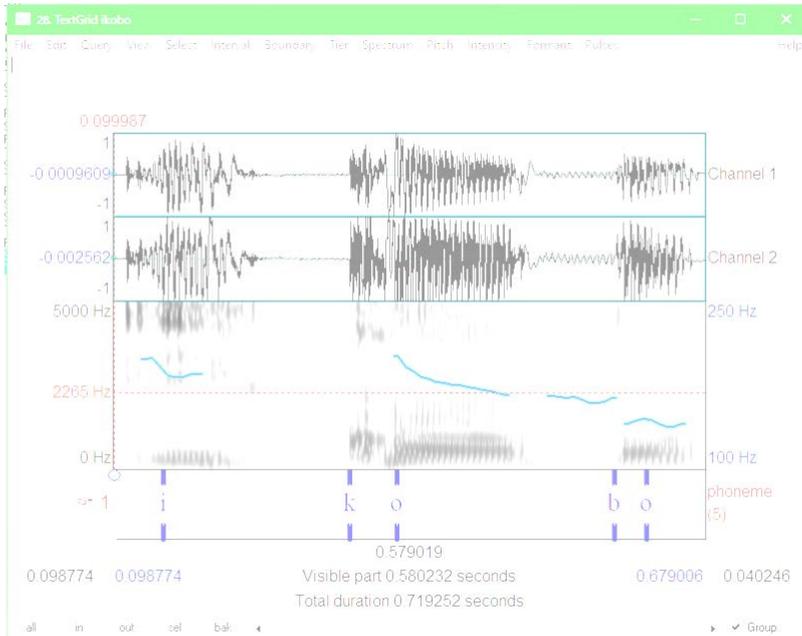
HLL: #ibata# 「アヒル」



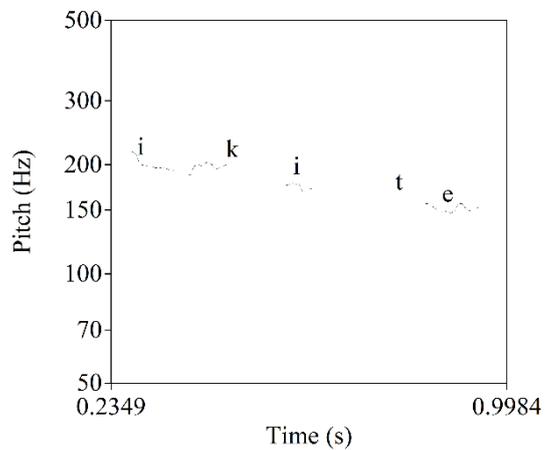
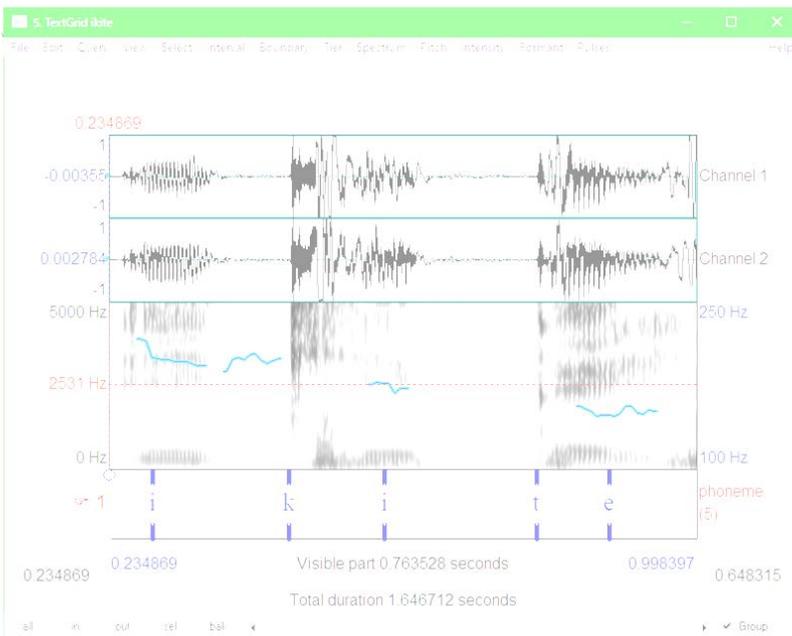
HL<sup>+</sup>H: #irinda# 「ガウン」



HHL: #ikobo# 「借金」



HHL: #ikite# 「犬」 ([íkíte ~ ík'íte])



HH'H: #mavele# 「乳房」

